

# ヘーゲル本質論とマルクス価値形態論

尼 寺 義 弘

## はじめに

ヘーゲル本質論の反省規定がマルクスの価値形態論の形成に一定の役割を果たしていることは『資本論』の当該箇所の叙述からみることができる<sup>1)</sup>。ヘーゲルが本質論で展開した「自己への反省」と「他者への反省」<sup>2)</sup>、そして両者の統一という基本的な反省の原理は、たとえば同一と区別、内容と形式などの対をなすカテゴリー把握において如実にみられる。この反省論の方法はマルクスの価値形態論の理論展開に援用されていると考えられる。すなわち一商品の価値が他商品の使用価値で表現される、という価値形態において一商品と他商品の価値関係(同一)における両極の形態上の区別の問題がそれである。われわれは以下においてヘーゲルの『エンクロペディー』によりながら反省規定と価値形態の関連について検討を加えることにしよう。(強調符…は引用者)。

## I ヘーゲルの論理学

周知のように、ヘーゲルは『小論理学』において有論・本質論・概念論を展開する。ヘーゲルの基本的な視角は従来より論理学として継承されてきた諸カテゴリーを批判し、新しい論理学、弁証法の論理学を構築することである。それは形式論理学の基礎をなす諸法則、たとえば同一律、矛盾律、排中律に集約される思惟法則の根本的な批判にみることができる<sup>3)</sup>。

ヘーゲルによる形式論理学批判は対象となる諸カテゴリーの肯定的な理解のうちに同時に否

定の理解を含むすぐれて弁証法的方法にもとづくものである<sup>4)</sup>。カテゴリー批判の展開によって貫徹される有論一本質論一概念論の論理学は、その体系と方法と内容からみて、実に壮大な理論上の建造物をなしているといえる。

もっともその卓越した理論は、ちょうど人体が腑分されてはじめてその構造が明らかとなるように、難解な文章にまとわれた哲学的思弁が学問的に解剖され、徹底して分析されてはじめて明確に述べられうるのである。したがってヘーゲルの展開それ自体をまず第一に有りのままにみていき、つぎにそれを分析的にそして総合的に、したがって弁証法的に考察していく視角が当然のこととして要求される。ヘーゲルの論理学は神秘的な、そして非科学的な側面やコジツケに類するような展開方法をつねにともなっている。それゆえに徹底した分析的方法にもとづく合理的な、批判的な視角からそれに対峙し、理論上の格闘を行うことによってのみ卓越した理論は生きているそれとして再生可能となるであろう<sup>5)</sup>。以上のことを導きの糸として、以下において本質論の「現象」の「内容と形式」を中心にみていくことにしよう。

## II ヘーゲル本質論の内容と形式

ヘーゲル本質論の基本規定は「反照」<sup>6)</sup>(媒介)である。有論の「移行」、概念論の「発展」に対して、本質論ではすべてのカテゴリーがそれぞれ一つの関係にあり、互いに対をなしている。たとえば、その関係は本質と現象によって代表されるが、さらにくわしく述べると、同一と区

別、根拠と根拠づけられるもの、物と質料、内容と形式、力と発現、内的なものと外的なもの、原因と結果などである。それは事物を「自己への反省」と「他者への反省」<sup>7)</sup>との統一として動的に把握する方法に由来する。

形式論理学はこれらの対をなすカテゴリーを「他のものへ関係することによってのみ、自分自身へ関係する」<sup>8)</sup>という反省関係において把握することができない。対をなすべき諸カテゴリーが滲透していず、本質上、互いに別々のもの、互いに独立したバラバラのものにとどまるのである。ヘーゲルはこうした見方を「反省的な悟性」<sup>9)</sup>あるいは「抽象的な悟性」<sup>10)</sup>の立場であるとしてつねに批判している。

さて、われわれはつぎにマルクスの価値形態論の理論構造と関連の深い「現象」の「内容と形式」を中心にみていくことにしよう。ヘーゲルは『エンチクロペディー』の第1巻「論理学」、第2部「本質論」、B「現象」、b「内容と形式」においてそれを論じている。B「現象」はa「現象の世界」、b「内容と形式」、c「相關」より成り立っている。ヘーゲルの論述に従ってB「現象」を検討しよう。

B「現象」のはじまりは「本質は現象しなければならない」<sup>11)</sup>である。この立言はヘーゲルの本質と現象についての独自の把握を端的に表現している。すなわち本質は「現象の背後または彼岸」にあるのではなく、本質の本質たるゆえんは「現存在すること」つまり「現象すること」にこそある。現象のなかに本質がある。したがって本質と現象を彼岸と此岸として、あるいは別々のものとして分離して理解するのではなくて、同一のものの「反照」<sup>12)</sup>関係にあるものとして、同一のものの区別（形式）として理解されている。この論理は本質論の「現象」に到る過程で明らかにされてきた諸カテゴリーの批判的考察において一貫して展開された方法の継続であるといえる。つまり同一と区別、根拠と根拠づけられるもの、物と諸性質などのように、対をなすカテゴリーの説明において「自己への反省（Reflexion-in-sich）」と「他者への反

省（Reflexion-in-Anderes）」<sup>13)</sup>との統一としてとらえる方法である。

さらに本質と現象についてヘーゲルが「補遺」のなかで述べていることを跡づけよう。

一般に「或るものが現象にすぎない」と言われる場合、追思惟すれば「直接的に対象的世界そのものの本性」を「現象にすぎない」として知ることになるのである。つまり本質は「まさに世界を単なる現象にひきさげることによって自分が本質であることを顯示するのである」。かくして「現象は有の真理であり、有より豊富な規定である。というのは、現象は自己への反省および他者への反省という二つのモメントを自己のうちに合一して含んでいるが、有あるいは直接態はまだ関係を持たないものであり、（外見上）自己にのみ依存しているものだからである」<sup>14)</sup>。

以上のように本質が現象することは、本質が「自己を直接態へ止揚することである」。この直接態は「自己への反省としては存立性（質料）」であり、「他者への反省」としては「形式」であり、両者の統一として「現存在する」<sup>15)</sup>現象である。つぎにa「現象の世界」からみていくことにしよう。

a「現象の世界」は「反省された有限性の総体」つまり種々の個々の現象より形成される。既述のように存立性と形式との統一として現象は把握されたが、ここでは形式が「存立性あるいは質料を諸規定の一つとして自己のうちに含む」こと、つまりモメント化することが述べられる。かくして現象するものはまず「自己内反省としての質料のうちに根拠をもつ」が、それによって同時に「他者内反省としての形式のうちにのみ根拠をもつ」<sup>16)</sup>。両者は「根拠」と「根拠づけられるもの」との新たなヴァリエーションとしてとらえられている。根拠づけられるものとしての形式が根拠である存立性あるいは質料を根拠づけるという展開である。この関係はつぎの「内容と形式」でさらに究明される。

b「内容と形式」は、現象の世界の「自己関係」をなす「全体性」によって規定される。

現象はかくして自己関係として、同一性として自分のうちに形式をもつ。したがって形式は「本質的な存立性」であり、「形式は内容である」<sup>17)</sup>。これはのちに展開されて「現象の法則」となる。「内容は自分自身のうちに形式をもち」、同時に形式は「自己への反省」として内容をもつといえる。さらに「内容とは、内容への形式の転化」であり、「形式とは、形式への内容の転化」<sup>18)</sup>である。これが転化の法則として「潜在的に」述べられている<sup>19)</sup>。もちろん形式には内容に無関係な外的な形式があることも指摘されている。

ところで、「補遺」は内容と形式の関係について理解しやすくつぎのように述べている。反省的悟性は一般に「内容を本質的で独立的なものとみ、これに反して形式を非本質的で独立的でないものと考えている。しかし、実際は両者ともに同様に本質的なものであって、形式を持たない質料が存在しないとないように、形式を持たない内容も存在しないのである。」<sup>20)</sup> 上述の例証として本の装訂や本の本たる内容と形式や「イリアス」や「ロミオとジュリエット」にみられる芸術作品のそれを掲げて、形式こそが内容の本質的規定をなすことが述べられる。さらに内容と質料について「質料は潜在的には無形式ではないけれども、その定有においては形式に無関係なものとしてあらわれているに反して、内容は、内容である以上、完全な形式を自己のうちに含んでいなければならない」<sup>21)</sup>。

さらに「補遺」は学問の分野における内容と形式の関係について述べている。諸科学の有限性と哲学の無限性の相違の問題である。諸科学はそれぞれ対象とする内容を外から与えられたものとして受けとり、思惟は「単に形式的な作用」<sup>22)</sup>にとどまる。内容と思惟作用は分離しており、形式と内容は完全に「惨透」<sup>23)</sup>しあっていない。諸科学はしたがって有限の認識であるといえる。哲学はこれに対して内容と思惟作用は合一し、形式と内容は完全に「惨透」しあう「無限の認識」<sup>24)</sup>をなしている。つまり思惟の諸規定（諸形式）それ自体が内容をなしているのである。つぎにB「現象」の最後の段階をなす

「相関」をみることにしよう。

C「相関」はさきにみた「現象の世界」と「内容と形式」との統一である。異なる二つのものの同一と区別の関係が新たなヴァリエーションにおいて考察される。相関は三つの項から、 $\alpha$ )「全体と部分」、 $\beta$ )「力と発現」、 $\gamma$ )「内的なもの」と外的なもの」から成立する。

$\alpha$ )「全体と部分」において、総括する全体が内容を、総括される諸部分が形式をなしている。この相関は反省的悟性にとってわかりやすく好都合なものであるとはいえ、両者は「直接的な」あるいは「外部的で機械的な」関係にあることから「概念と実在とは一致していない」<sup>25)</sup>。したがって「有機的生命の真の姿を認識するには不十分なものである」<sup>26)</sup>。

$\beta$ )「力と発現」はさきの「全体と部分」の機械的關係およびのちの「内的なもの」と外的なもの」の必然的關係の中間に位置する。全体と部分の關係では両者はいわば直接的關係にあり両者の同一性は潜在的にとどまっていた。「力は発現することによってはじめて力であることを示す」<sup>27)</sup>。ここに力と発現という二つの側面（形式）の同一性（内容）が定立される。この關係の有限性は「どの力も制約されていて、存立するためには自己以外のものを必要とする」<sup>28)</sup> ことにある。したがって力と発現もその内容と形式との真の同一性がえられていず有限的な認識にとどまっている。

$\gamma$ )「内的なもの」と外的なものは、さきにみた「全体と部分」および「力と発現」の統一であり、両者のもつ有限性の解決形態である。一般に悟性は内的なものと外的なものを分離し、内的なものを本質的なもの、外的なものを非本質的なものとみる。だがこの見方は正しくない。内的なものは外的なものと本質的に同一のものである。つまり1)「外的なものは内的なものと同じ内容である」。「現象が示すものはすべて本質のうちにあり、本質のうちにあるものはすべて顕現されている」<sup>29)</sup>。2) 内的なものは「自己同一」であり、外的なものは「単なる多様性あるいは実在性」である。したがって

両者は「形式規定として対立しあっている」。「しかし両者は一つの形式のモメントとして、本質的に同一のものである」<sup>30)</sup>。

以上のように、われわれはB「現象」全体を内容と形式という基本視角から検討してきた。ヘーゲルは対をなすいずれのカテゴリーの批判的考察においても抽象的悟性の分離的な把握を徹底して批判する。両者の同一と非同一（区別）さらに両者の統一の関係を「自己への反省」と「他者への反省」という視角から分析する。この視角が新たなカテゴリーの展開において新たなヴァリエーションとして応用されているといっている。われわれは以上の展開を踏まえてつぎにマルクスの価値形態論をみることにしよう。

### Ⅲ マルクスの価値形態論

マルクスは『資本論』の最初の章で、古典派経済学が取り扱うことのできなかった商品の価値形態<sup>31)</sup>の独自の意義を明らかにしている。商品の価値の実体の分析を前提にして彼はつぎのように述べている。

「われわれは今や価値の実体を知っている。それは労働である。われわれは価値の量の尺度を知っている。それは労働時間である。価値をまさに交換—価値へと刻印づける価値の形態は、まだこれから分析されねばならない。」<sup>32)</sup>

かくして価値等式 20エレのリンネル＝1着の上着 が与えられ、価値形態の分析が開始される。現行版『資本論』のA「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」の1「価値表現の両極」はつぎのように述べている。

「相対的価値形態と等価形態とは、同じ価値表現の、相互に属しあい、相互に制約しあう不可分離なモメントであるが、同時にまた、相互に排除しあう、または対立する両端、すなわち両極である。」<sup>33)</sup>

「リンネルの相対的価値形態は、何か他の一商品がリンネルにたいして等価形態にある、ということを経験している。」<sup>34)</sup>

以上のように価値表現の両極をなす相対的価値形態と等価形態は、互いに依存しあい、互いに補足しあう関係、互いに不可分離なモメントであり、反省しあう関係にあるといえる。すなわち価値表現という同じ一つの本質の、同一性の区別（両極あるいは両形態）といえる。

なお上記引用のなかで両形態は「相互に排除しあう、または対立する両端、すなわち両極である」と述べられているのを、発展の原動力としての現実の矛盾ととらえないことが重要である。両極は或る商品と他の商品との交換関係から抽象された同等性関係と価値関係を前提している。この価値関係という一つの本質の形態上の区別、すなわち反省関係にあるといえる。つまり商品の二要因の直接的な統一としての矛盾の関係にあるのではない<sup>35)</sup>。

マルクスはさらに両極の関係について初版『資本論』『付録』においてつぎのように述べている。

「内容からみれば、両方の表現、

- 1) 20エレのリンネル＝1着の上着 あるいは、20エレのリンネルは1着の上着に値する、
- 2) 1着の上着＝20エレのリンネル あるいは、1着の上着は20エレのリンネルに値する、

はまったく相違がない。形態からみれば、たんに相違しているだけでなく、対立している。」<sup>36)</sup>

以上のように、価値を表現する商品と表現手段となる商品との形態上の区別の前提として内容上の同等性関係がはじめに言明されている。内容と形式の関係を考察するうえで重要な指摘であるといえる。

つぎにわれわれは両極を以上のように形態づける一商品の価値の他商品の使用価値による表現についてみることにしよう。上述の 20エレのリンネル＝1着の上着 において自分の価値を表現しようとするのはリンネルである。イニシアティブはリンネルがもっている<sup>37)</sup>。かくしてリンネルは上着に価値として連関する。すなわち「リンネルは他の商品を自分に価値として

等置することによって、価値として自分自身に連関する。リンネルは、価値として自分自身に連関することによって、同時に使用価値として自分自身から自分を区別する。リンネルは自分の価値量——そして価値量は価値一般と量的に計られた価値との両方である——を上着で表現することによって、自分の価値存在に自分の直接的な定有とは区別される価値形態を与える。リンネルは、こうして自分を、自分自身において分化したものとして表示することによって、自分をはじめて現実商品として、すなわち同時に価値でもある有用物として表示するのである。」<sup>38)</sup>—商品は他商品との価値関係において自分自身を同一と区別の関係におく。すなわちこの関係においてリンネル商品は価値として上着商品と同一（等置すること）であり、使用価値として上着商品と区別（異なるものであること）される。

かくしてリンネルは商品語でつぎのように語るのである。「リンネルは1) 使用価値（リンネル）であり、2) それとは区別される交換価値（上着と同等なもの）であり、3) この二つの区別されたものの統一、つまり商品である。」<sup>39)</sup> 商品は素材（使用価値）として、形式（価値）として、自己自身を分裂（区別）させ、自分を二重物の統一として具体的に表現しているのである。あるいはまたつぎのようにも述べられる。「商品のうちに包みこまれている使用価値と価値との内的な対立は、一つの外的な対立によって、すなわち二つの商品の関係によって表現される」<sup>40)</sup>。

両極の形態規定についてさらに検討を加えよう。「リンネルの価値は、上着にたいするリンネルの価値関係によって、顕現するのであり、感覚的な表現を得るのである。リンネルが上着を価値として自分に等置しながら、他方で同時に自分を使用対象として上着から区別する、ということによって、上着は、リンネル—物体に対立するリンネル—価値の現象形態となり、リンネルの自然形態とは区別されるリンネルの価値形態となるのである。」<sup>41)</sup> かくして上着は上着

という自然形態がリンネルの価値形態となる。つまり上着は「一つの新しい役割を演ずる」<sup>42)</sup>のである。それは「他商品との直接的交換可能性の形態を、一つの交換可能な使用価値の、または等価物の、形態をもつ」<sup>43)</sup>のである。上着の独自のこうした「一つの新しい形態」<sup>44)</sup>は「いわば、リンネルの反省規定 (Reflexionsbestimmung) にほかならないのである。」<sup>45)</sup> 上着はここに経済的形態規定として独自の意義をもつことになる。素材（使用価値）が形態（価値）に転換される。かくして相対的価値形態と等価形態はリンネルの上着による価値表現の「形態内実」<sup>46)</sup>をなすものといえる。

## むすび

以上みてきたようにヘーゲルは反省規定を駆使して旧来の論理学を批判するという形式において本質論を仕上げている。それは伝統的な形式論理学がそれぞれ独立のものとみた対をなすカテゴリーを自己への反省と他者への反省、同一と区別との統一として理解する。その理論はマルクスの価値形態論という新しい経済理論において再生しているといえよう。すなわち価値形態をなす両極の形態規定の弁証法的理解である。以上の点について詳しくは『大論理学』の該当箇所と比較分析がさらに必要とされる。それは別稿で検討を加えたい。

## 注

- 1) マルクスは価値形態の等価形態の第一の特徴の注でつぎのように述べている。「およそこのような反省規定 (Reflexionsbestimmungen) というものは奇妙なものである。たとえば、この人が王であるのは、ただ、他の人々が彼にたいして臣下としてふるまうからでしかない。ところが、彼らは、反対に、彼が王だから自分たちは臣下なのだと思うのである。」(K. Marx: Das Kapital, Bd. I. In: K. Marx/F. Engels. Werke. Berlin 1958ff. Bd. 23. S. 72.)
- 2) G. W. F. Hegel: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I. In: G. W. F. Hegel: Werke in zwanzig Bänden. Hrsg. E. Moldenhauer und K. M. Michel. Frankfurt a. M. 1969ff. Bd. 8/I. S. 261f. 松村

- 一人訳『小論理学』下巻、岩波書店、1952年、55ページ。
- 3) ヘーゲルは同一の法則についてつぎのように述べている。「この法則は真の思惟法則ではなく、抽象的悟性の法則にすぎない。すでにこの命題の形式そのものがこの命題を否定している。およそ命題というものは、主語と述語とのあいだに、同一のみならず区別をも持たなければならないのに、この命題は命題の形式が要求するところを果たしていないからである。しかし特にこの法則を否定しているのは、この法則に続く他のいわゆる思惟法則であって、それらはこの法則と反対のものを法則としているのである。」(Ebd. S. 237. 同訳書19-20ページ。)
- さらに「すべてのものは異なっている」とか、「互いに全く等しい二つのものは存在しない」という差別の命題について、「ここではすべてという主語に、最初の命題において与えられていた同一性という述語とは反対の述語が与えられている。したがって、最初の命題に矛盾する法則が与えられているわけである。」(Ebd. S. 240. 同訳書24ページ。)
- また排中の原理について「悟性が主張するような抽象的な『あれか、これか』は実際どこにも、天にも地にも、精神界にも自然界にも存在しない。あるものはすべて具体的なもの、したがって自分自身のうちに区別および対立を含むものである。」(Ebd. S. 246. 同訳書33ページ。)
- 4) ヘーゲルは弁証法的方法について「必然性の認識」(Ebd. S. 246. 同訳書32ページ。)あるいは「概念的認識」(Ebd. S. 302. 同訳書113ページ。)とも述べている。
- 5) ヘーゲル論理学研究についてはつぎの文献を参照されたい。
- ヘーゲル論理学会編『見田石介「ヘーゲル大論理学研究」』第1巻、第2巻、第3巻、大月書店、1979-1980年。
- ヘーゲル論理学会編『ヘーゲル大論理学概念論の研究』大月書店、1991年。
- Hiroshi Uchida: Logik der Produktion: Marx' Grundrisse und Hegels Logik, Hrsg. und eingeleitet von Walter G. Neumann, Verlag für die Gesellschaft, Hannover, 1994.
- 6) Hegel: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I, S. 308-309. 『小論理学』下巻、123-124ページ。
- 7) Ebd. S. 261. 同訳書55ページ。
- 8) Ebd. S. 231. 同訳書9ページ。
- 9) Ebd. S. 268. 同訳書65ページ。
- 10) Ebd. S. 280. 同訳書82ページ。
- 11) Ebd. S. 261. 同訳書55ページ。
- 12) 「反照するということは、それによって本質が有でなく本質であるところの規定であり、そしてこの反照の発展した形態が現象である。」(Ebd. S. 261. 同訳書55ページ。)
- 13) Ebd. S. 261. 同訳書55ページ。
- 14) Ebd. S. 262-263. 同訳書57ページ。
- 15) Ebd. S. 261-262. 同訳書55ページ。
- 16) Ebd. S. 264. 同訳書59ページ。
- 17), 18) Ebd. S. 264f. 同訳書59-60ページ。
- 19) 形式の内容への、内容の形式への転化の法則は「絶対的相関」において「形式活動」として具体的に論ぜられる。(Ebd. S. 294f. 同訳書103-104ページ。)
- 20), 21), 22), 23), 24) Ebd. S. 265-267. 同訳書60-62ページ。
- 25), 26) Ebd. S. 267-268. 同訳書64-65ページ。
- 27), 28) Ebd. S. 271. 同訳書68-69ページ。
- 29), 30) Ebd. S. 274. 同訳書73-74ページ。
- 31) 経済学では“Wertform”, “Warenform”をそれぞれ「価値形態」, 「商品形態」と訳している。本稿でも経済学に関する“Form”は「形態」と訳すことに従っている。
- 32) K. Marx: Das Kapital. Bd. I. 1. Aufl. Hamburg 1867. S. 6.
- 33), 34) K. Marx: Das Kapital. Bd. I. In: K. Marx/F. Engels. Werke. Berlin 1958ff. Bd. 23. S. 63.
- 35) 拙著『価値形態論』青木書店、1978年、第3章「価値表現の分極性」参照。
- 36), 37) K. Marx: Das Kapital. Bd. I. 1. Aufl. S. 766.
- 38) Ebd. S. 16.
- 39) Ebd. S. 776.
- 40) K. Marx: Das Kapital. Bd. I. Werke. Bd. 23. S. 75.
- 41) K. Marx: Das Kapital. Bd. I. 1. Aufl. S. 17-18.
- 42) Ebd. S. 20.
- 43), 44) Ebd. S. 17.
- 45) Ebd. S. 22.
- 46) Ebd. S. 21.
- 「形態内実」についてはつぎの文献を参照されたい。
- NIJI Yoshihiro: Der Formgehalt oder Forminhalt des Wertausdrucks in der Politischen Ökonomie von Karl Marx — die Hegelschen Logik als Quelle des Marxschen Wertbegriffs. 『阪南論集社会科学編』第31巻第2号、1995年。

(1997年1月14日受理)